ほのぼの

第６０号
特別版
令和４年
３月

発　　行
信行寺門信徒会
神戸市須磨区戎町１－２－３
TEL.０７８－７３２－５２０９

住職継職奉告法要

虚しくない人生を

前住職

ある時、水道管の取り替え工事の現場に遭遇しました。地中深く埋められていた古い水道管が地上に引き上げられて道路の端に放り出されていたのです。それで、管の内側をのぞいて見ますと、内側には水垢が溜まってかなり狭くなっていました。飲み水ですから水道管にはきれいな水が流れているものだと思っていましたので、予想外の光景を目にしたことでした。「清水も流れ続けると水垢が生じる」と言われた人がいました。それをわが身の上に受け取らせていただいた次第です。そういえば、高齢になると血圧が高くなったり、脳梗塞や心筋梗塞などの血管関係のトラブルが多くなったりするのもこれと同じ現象によるのでしょうか。

誰でも経験していることですが、人間、生活しているうちについついあれも要る、これも必要といって買い求め、知らぬ間に物が増えています。生活ゴミも必ず出ます。気づかないと対処できません。

世の中には、有っても見えにくいものと、直ぐに見えるものとあります。見えるものは気づきやすく、見えてないと気づきにくい。人間は自分の、見えるものや気づいたものだけが全てであると錯覚し、有無を決めがちです。その結果、有っても見えていなければ「ない」と短絡的に判断して、口に出したり行動に移したりしてしまう。人の眼は壁の向こうは見えません。眼前に障害物が有ると、存在していても見ることができない事実を忘れないようにしたいものです。

また人間の眼は誰でも「私が・・・」という自分中心の色眼鏡をかけて見ています。このメガネは終生はずれません。それが私たち人間という生き物です。これと全く違っている眼は仏さまの眼です。仏の眼は三千大千世界のすべての事を見通され、すべてを知っておられます。阿弥陀仏の眼は私たちのすべてを知り尽くされています。それゆえに阿弥陀仏の見ておられる世界を聞かせていただき、知らせていただきながらの日々、阿弥陀仏に導かれて日々を過ごすことが人生において重要になってきます。「あなたの見えている世界、意識している自分はあなたの全てではないよ。仏に成る尊い命を生きているのですよ。このことを忘れないように」と励ましてくださいます。

他人の顔、他人の欠点はよく見えるのに自分自身のことは見えないのが人間です。眼は顔についているのに自分の顔を直接見ることはできないのと同じことです。私たちは、知らないのに、自分のことは自分が一番知っていると自負しています。「知っているつもり」でいるだけです。悲しい事実です。親鸞聖人は「縁によっては何をしでかすか分からないわが身」であるとご述懐されています。見落としがちですが、日常生活の上での慣習や流行も人生の一番大切なことを覆っているようです。慣習にとらわれる。流行に流される。疑問を抱くこともなく、これらを「当然」のこととして日々が過ぎていく。今の世を仏さまは濁世といわれます。濁った水の中にいるようなものですから私たちの眼では本当のことが見えにくいのです。世の中に溢れている情報に迷うばかりです。

私たちは「生きていたい」と思います。生きるために食べる、着る、住む。そのためには当然お金、健康、知識などが不可欠です。この判断のもとに与えられた人生のすべてを使おうとする。同時に「人生を虚しく過ごしたくない」と願う心が人生の根底にあります。

水道管も古くなると管の内側が水垢で狭くなるように、人間も老いてくると活動範囲が狭くなってきます。近ごろ年賀状に「高齢のため、本年を以て年始のご挨拶の最後とさせていただきます・・・」と書いておられる人が増えました。付き合いの幅が狭くなったわけです。体力的にも行動範囲が狭くなる。根気もながく続かない。これまで出来ていたことが出来ない。健康でおれる時間も短くなるし、物忘れもあきれるほどになる。何もかもが狭まるばかりです。「食べておれば、生きておれるつもり」でおりましたが、「つもり」が力にならないことがわが身に感じることです。すべての現象は変わります。社会状況もこの心身も変わり、諸行は無常です。「食べたら死なない」という「つもり」が、仏の眼で見られた世界を拒み続けています。食べるだけでは人生が「虚しく過ぎる」だけです。変わらないつもり、苦しい目にあうはずがないつもり、思い通りに出来るつもり、悪いことはしていないつもり、「つもり」を土台にして生きています。「こんなつもりではなかったのに、残念だ」で終わっていいのでしょうか。

人生百年の時代が来るそうですが、「嬉しいような、悲しいような」です。百年生きても「百年食べてきただけだった」で終わる人生ほど悲しく虚しいことはありません。阿弥陀仏のご本願の力は、私たちの人生を虚しくさせない「はたらき」です。私たちに働きかけておられる阿弥陀仏の大悲の声に導いていただきましょう。南無阿弥陀仏だけです。

門信徒の皆さま、後継の住職・副住職を私同様にお育ていただきますよう、よろしくお願い致します。有り難うございました。

合　掌

「護法城」

住職

昨年十一月無事に住職継職法要を勤めさせていただき、第四世信行寺住職に就任させていただきました。当日はたくさんの門信徒の方々に参拝いただき本当にありがとうございました。また、ご参詣くださった方のみならずお寺まで足を運べなかった有縁の方々からもお祝いと励ましのお言葉をいただきました。まことに有り難いことです。この信行寺にとって大切な節目であると同時に、私の人生においても大きな節目となりました。改めて多くの門信徒の方々のご縁に感謝すると共に、震災後の信行寺復興に尽力してきた前住職と前坊守の後を引き継ぐ者として襟を正す思いがいたしました。

思えばこの信行寺は大正末に私の曾祖父が鳥取から神戸に出てきて小さな布教所から始めました。仏法が世の中の人々の灯となるように、そういう思いで開いた信行寺の法灯が、祖父にそして父である前住職に受け継がれてきました。前住職は毎月三回の法話会をはじめ年六回の各法要や夏期特別法座を何十年も途切れることなく続けてきました。そしてコロナ禍においても、感染対策をとりつつ今までどおりお寺に参っていただけるようにすると同時に、法話会や法要のオンライン配信も始めました。それは今のような不安な時代だからこそ、世の中の人々の心の支えとなるよう、仏様の教えが必要だと思うからです。二年間続くコロナ禍の中で先の見えない不安感が社会を覆っています。釈尊が「一切皆苦」と説かれた通り、この世は私たちの思うようにならない世界であることを痛感いたします。

釈尊は、この世界と私たちのあるがままの姿を「縁起」という言葉で表わされました。私をふくむすべての物事は原因や条件が互いに関わりあい影響しあいながら存在しているという真実です。ですから私という存在はそれだけで独立して存在するということはあり得ないのです。目に見えないウイルスが瞬く間に世界中に広がった事実はそのことを証明しているかのようです。本来、私たち一人一人は無数につなぎ合わされ

た網の目のひとつのような存在なのですが、釈尊のようにあるがままの姿をみる智慧がない私たちは、常に自己中心的な心で物事をとらえてしまいます。自分にとって損か得か、好きか嫌いか、善いか悪いかと、自我という色眼鏡を通して世界を見ています。この自己中心的な心のことを仏教では無明煩悩といいます。私たちは自分の力で生きていると考えてしまいますが、ご飯を食べ水を飲まないと生きていけません。空気がないと息をすることもできません。大地や太陽、海や川など自然の恵みを受け、そして多くの生き物のいのちに支えられて生かされているのです。そして、このすべての命のつながりの根底に流れ、私達を照らし育みつづけるはたらきを仏の大悲心、本願といいます。

お寺の正門階段を上がったところに「護法城」という額が掲げてあります。震災で焼ける前のお寺の本堂にも同じように「護法城」の額がありましたが、その護法というのは法を護るということです。仏法という釈尊の教え、親鸞聖人の教えを護っていくということです。そして法城というのはお寺のことです。信行寺を今まで護持してきた歴代住職やご門徒の思いを、この「護法城」という言葉の中に改めて考えさせていただきました。

私が仏法のことを何も知らなかった子供の頃、ご門徒の方々が「なんまんだぶ、なんまんだぶ、ありがたいなぁ…」と念仏がこぼれるように口に出る姿が今でも思いだされます。仏法は毛穴から入るといいますが、私も何度も聴聞を重ねていく中でじわりじわりとお育てをいただいてきました。信行寺が今後も私たちの生きていく心の支え、心の灯となっていけるよう、仏法を護っていくお寺として門信徒の皆様とともに歩を進めていきたいと思います。

どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

「前に生まれんものは後を導き、
後に生まれんひとは前を訪へ、
連続無窮にして、
願わくは休止せざらしめんと欲す
無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり」

合掌

住職継職法要に立ち会えて

門信徒会長　新田　泰三

昨年十一月二十七日は信行寺にとりまして、又門信徒にとりましても、心にも記憶にも残る日であったと思います。お寺にはいくつか大きな行事がありますが、中でも最も重要な行事の一つが継職法要かと思います。その行事に立ち会う機会に恵まれたことに感謝の言葉しかありません。

この二年間、日本だけでなく世界がコロナ感染症に翻弄され、私生活はもちろんのこと、文化活動、経済活動の停止、停滞は国の発展にブレーキをかけました。そんな中、継職法要当日は、少し感染状況が落ち着き、十一月と思えない程穏やかな晴天となりました。来賓の皆様はじめ、たくさんの門信徒にご臨席いただき、喚鐘を合図に厳かに法要が開式されました。入堂後、住職任命状の伝達が執り行われ、その瞬間、恵悟新住職が誕生しました。筆頭総代挨拶、石田総代より新住職へ七条袈裟の目録贈呈が行われた後、勤行。そして、新住職挨拶、前住職への記念品贈呈、前住職より特別功労者への感謝状贈呈、前住職の最後の法話をもって法要が終了しました。礼拝堂では、記念演奏会が行われました。

世間一般の話として、お寺の後継者の減少、不在により、お寺の存亡などをよく聞きますが、新住職におかれましては、御両親の良き薫陶と共に資質にも恵まれ、立派に成長されました。また、御長男もすでに得度され、大学卒業後も大学院で更に励んでおられます。檀家の一人として、門信徒の一人として、この上ない喜びであります。しかしながら仏教界のみならず、全ての社会各界に、難しい問題が山積いたしております。只々、門信徒の拠り所となり、地域社会の核として、リーダーとして、変えるべき所は変え、守るべき伝統は死守することが次世代への発展に繋がることと信じております。

私自身継職法要を迎えるにあたりまして、前御住職、前坊守様の御苦労を思うに、筆舌に及ぶところでありませんが、この半世紀振り返らずにいられない所

であります。前々住職の急逝により、急遽住職就任、平成七年のあの大震災では仏具から経典、生活用品全て焼失しました。避難生活が続く中、本堂再建のために奔走され、まさにマイナスからのスタートでありました。そんなご苦労により今日の継職法要を迎えられたことに改めて感謝とお礼を申し上げます。これからは、新住職、新坊守さんのお役に立てるよう門信徒一同で支えて参ります。

合　掌

住職継職奉告法要

多田　文男

令和三年十一月二十七日住職継職奉告法要が、信行寺にて行われました。新住職の堂々とした所作に感服するとともに、大仕事を終えられた前住職のご苦労に称賛させていただきました。

私事で恐縮ですが、一昨年自分が創業した会社の代表を息子に引き継いでもらいました。一抹の寂しさや不安はありますが、継承してもらうことは大変うれしいものです。それと比較するのは恐れ多いことですが、阪神大震災で大きな痛手を被ったお寺を、今日のように立派に再建された前住職のお心の内が推し量れるような思いです。しかし、新住職は若いころからインドへ渡り単身修行され、豊富な仏教知識を持って長年副住職として、沢山の門信徒を導いてこられました。その方が引き継がれたのですから、こんな恵まれたお寺は滅多にないと思います。思えば私の祖母が、未だ先々代の住職が御健在の頃、「次の代（前住職と前坊守）が後を継げば、きっと信行寺は栄える」と言っていたのを思い出します。その通り継職され、今やその息子様たちが、新住職、新副住職となられ、さらに次世代のお孫様たちが次の時代に控えておられます。継職式における信行寺の皆様のお姿に、お寺の輝かしい未来を見る思いでございました。

浄土真宗のお寺は、親鸞聖人の説かれたお念仏の教えを聞き、伝える場所と聞いておりますが、現在は葬式・法事がメインのお寺が数多くなっています。しかし、信行寺は絶えず法座を開き、親鸞聖人のお念仏の教えを説き、

伝えられています。幼い頃の私は「おばあちゃん子」でどこへでも祖母について行っていましたが、お寺へもよくお参りしていたようです。いわゆる「門前の小僧」だったのでしょう。正信偈の一部を諳んじたり、現在の信行寺で歌うメロディーとは違いますが、恩徳讃を歌ったりしていたようです。

その頃、祖母と聴聞した法座の様子を今でもはっきりと覚えています。本堂の片隅にあった、小さめのお部屋だったと思いますが、黒板の前に立った講師様を囲んで、十数人の聴聞者が座って聞いておられました。ご法話自体は全く理解できなかったと思いますが、天の四神いわゆる東の青龍・西の白虎・南の朱雀・北の玄武のお話があり、時代劇映画が大好きだった私の頭にすぐに吸収でき大変うれしかったことを覚えています。

歴史ある法座をこの先もずっと続けていただき、新住職のお力をもって広く親鸞聖人の教えを説かれ、信行寺を浄土真宗屈指のお寺とし、門信徒をお導きくださるよう願っています。

両親のご縁をいただいて

上内　智裕

令和三年十一月二十七日、私は住職継職奉告法要に参加させていただいておりました。右も左も分からないとはいえ総代として参加させていただき、恐縮と緊張の中でお勤めをさせていただきました。信行寺様にとって大事な節目の法要に参加させていただいたことは、とてもありがたく身の引き締まる思いでした。

つい最近まで、私自身は家の法要以外はなかなかお寺にお参りする機会がなく、また意識したこともありませんでした。前ご住職から総代就任のお話をいただいた時に、なぜ私がお話をいただくのだろうと不思議に感じると同時に、何かお手伝いできることがあればという気持ちもありました。しかし、気持ちはあっても仕事の都合でお寺の行事に思うように参加ができず、かえってご迷惑をかけてしまうのではないかという懸念も強く持ちました。迷っている私に前ご住職は、「貴方の年齢なら仕事をバリバリこなしているのは

当たり前、手伝えることがあればという気持ちを持ってくれているのであればそれで十分、新住職と同じ世代のあなたにぜひお願いしたい。」とのありがたい言葉を頂戴しお受けすることにいたしました。

その後、お寺の皆様と話すうちに両親がお参りでお世話になっていたことや前ご住職、そして奥様と色々な話をしてご縁をいただいていたことを知りました。私は、自身にいただいた総代就任の話をとても不思議なことと思っておりましたが、両親を通じて仏様や信行寺様とのご縁をすでにいただいていたのだと気づきました。きっと両親は今頃「あんたに務まるんかいな。大丈夫かいな。」とハラハラしていると思います。お寺のことをほとんど意識したことがなかった私が、今は亡き両親が紡いでくれた縁でこの立場にいることの意味やありがたさを感じながら、少しずつお手伝いできることが増えるよう努めてまいります。

皆様今後ともよろしくお願いいたします。

合掌

心のよりどころ

坊守　米田　悦子

私の神戸での暮らしは、阪神大震災の前年の十一月末に被災前の信行寺の本堂で家族だけの結婚式を挙げさせていただきスタートいたしました。澄んだ空気と穏やかな海岸が美しい神戸。あのような震災が起ころうとは思いもかけないことでした。

わけもわからない私を震災の傷跡が色濃く残る町並みと暮らしの中で、門徒さん方々はとても温かく迎えて下さいました。また、被災してすぐに簡素な仮設から法座を続けていく前住職と前坊守の姿は、とても心強く勇気を与えて頂きました。私は、そんな中から聴聞を始める事ができましたことに、とても感謝しております。法話に耳を傾け、門徒さんのひたむきな姿に多くの事を学ばせて頂きました。仏法は、人から人へ伝わるということ。あのような災害に遭いながらも変わる事ない互いの心の繋がり。その拠り所となっていたのが信行寺でした。やがて、本堂も再建する事が叶い、そんな慶びの中、私にも二人の子供に恵まれまし

た。子育て中もご門徒の方々にたいそう可愛がって頂き、子供達も賑やかな法座が何よりも楽しみでありました。そんな二人もすっかり成人して、法要の際には法衣を付けて、前住職、住職と共にお経をあげさせて頂ける身となり、有り難く、また心強く思うこの頃です。

つくづく多くの方々に助けられてきた二十七年間でありました。これからは、私にもできうることをひとつひとつ勤めると共に、前住職、前坊守の思いをしっかりと受け継ぎ、次の世代へ渡していけますよう尽力させて頂きます。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

住職継職法要を終えて思うこと

前坊守　米田　弘子

前住職前坊守となった私達は、かねてより八十歳を期に世代交代しようと考えておりました。信行寺二世（私の両親）より受け継いでから四十余年、住職として担ってきた責務を振り返ってみますと一言では言い尽くせないものがあります。この機会に信行寺の百余年の歴史を振り返ってみたいと思います。

信行寺は大正時代私の祖父母が鳥取から神戸へ出て布教所として一宇を構えたのが始まりです。昭和二十年太平洋戦争で寺院は焼失、その後の苦労は全ての日本国民が経験したことです。物不足の中、両親は一日でも早く聴聞できるようにしたいという一心で現在の板宿の地に再建を果たしました。私が小学校三年生だったと思います。地域の檀家さん方の支えの下、毎月参り、各法要を行い、お寺としての活動を始めました。特に母は仏法聴聞に大変熱心で、ご講師様を招いては法座の集いを度々開いて多くの門信徒様がお参りされました。そんな折、私は一緒に座ってなんとなく聞いていることが好きでした。次第に手伝うことが自然と喜びとなっていました。

昭和四十三年、前住職が後継者として入寺しました。その後、古かった内陣修復もでき、一応役目を果たせたかと思った矢先、阪神大震災でこれまでのもの全て灰になってしまいました。当時は茫然と立ちすくみ何も前が見えなくなってしまいました。しかし、門信徒の皆様の「早く皆が集まって仏法を聴聞できる場所を作ってほしい」という後押しとご協力があって、また生き返った思いでもう一度青春をしてみようと二人で力を奮い起こしました。そして、篤信者の強力なご支援があってこそ前を向いて進んでまいることができました。被災してから二十八年、本当に多くの方々のおかげで現在の立派なお寺が再建され、復興がかない感謝の念に堪えません。

前住職は広島より縁あって信行寺に入寺し、仏法の勉学にひたすら励み努力する真面目な人でした。親鸞聖人様の生きざまを手本にしたような人だと私は尊敬し続けています。毎日の法務にも疲れを知らず、食事をすることすら忘れてご法話をすることもありました。震災後も愚痴も泣き言も言いませんでした。このような人だからこそ、人望もあり、信頼されてきたのだと思います。

父は娘三人でしたので後継者に悩んだことでしょう。孫（今の恵悟住職）が生まれた時には大変な喜びようで、いつも膝の上にのせながら食事をしていた光景が目に浮かびます。その孫が後を継いでくれることにさぞ喜んでいることでしょう。私達の責任で次の世代にしっかりと譲り渡しましたよと笑顔で喜びを報告できることに安堵の気持ちでいっぱいです。先祖の苦労があってこそ、今があると思います。

皆様、ありがとうございました。今後は新住職たちが信行寺のモットーであるお念仏を広く末永く伝え、門信徒様を大切にしながら信行寺の発展につなげていってくれることを願ってやみません。

合掌

信行寺行事予定とご案内

春の彼岸法要

三月二十六日（土）　住職
二十七日（日）　前住職
両日とも午後二時～三時半ごろ

第二十一回 門信徒会総会

四月二十三日（土）午後二時より
おつとめ・総会・法話
＊状況にもよりますが、実施する方向でおります。
参加をお待ちしております

花まつり

今年度もなかなか大人数で触れ合うことが難しいため、中止とさせていただきます。

今回の６０号は、住職継職特別号として
ページを増やしました。

編集委員より

記念すべき十一月二十七日は、風こそありましたが晴天でした。新型コロナウイルス感染症の感染者も一桁に減少するも規模を縮小して住職継職奉告法要が行われました。

令和元年に往生された、辻英子様より生前いただいた着物と帯を身に着けて私も参加させていただきました。厳かに式典が進行して身が引き締まる思いで有り難い時間でした。先に往生された方々、体調不良で参列できなかった方々の想いを感じながら、この先も信行寺の為に微力ながら皆でお手伝いしていきたいと改めて感じた法要でした。

記念品に頂きました前住職著「今日も　一日　ありがとう」の本は読み出すと親鸞聖人の教えと前住職の心の詰まった内容に釘付けになりました。新住職の大学生の時のエピソードは親心がにじみ出て胸が熱くなりました。光輪さんの挿絵も心が和んで何とも言えず良いのです。幸せな感動をありがとうございました。

中川　さなみ